前）に始めて日本に入り、本草学者の大典となり、7、8通りの和刻本が出版された。同書の第37巻、竹の条下に「枝の一なるものを雄となし、二なるものを雌となす。雌は筍を生ず。」もと漢文と。

わが国の有用竹、すなわち、マダケ、ハチク、モウソウチクは、いずれもマダケ属のグループであって、通常、1節から2本の枝が出るのである。この最下の節から枝の2本出たものを雌竹と呼び、1本出たものを雄竹と呼んでいる。このようなものを種苗として移すと筍が出ないなどと言われてきた。特に徳川時代にはあらゆる作物を上述のように雌雄に別けて、さらに雌を植えた方が有利であるなどと力説したものである。さらに驚くべきことには、昭和の今日でも、雌竹の方が筍が多く出るなどと結論づけた学者のあることである。

しかし、2本の枝が出ると言うのは太い方は枝であるが、小さい方の枝は、実は枝から出た枝、すなわち子枝であるので、前述の事柄が根拠のない事であるという事が判って貰えると思う。

この雌雄竹と言うのは、生殖器官に全く関係は無いし、この単枝で、稈の密生する藪に多く、雌竹は太いものに多く現われる。また、竹の種類によっても差が見られる。また、竹の種類によっても差が見られる。すなわち、マダケ林では単枝（雄竹）が30～35%、双枝（雌竹）が65～70%で、モウソウチク林では逆になって、雄竹の方が多く、70%も生じている。

なお、以上の外、若い男女が不義を重ねた罪で2人の持っていた杖が巻きつき根を生じた捻れ巻きつく話（竹と笹、73ページ）、親鸞上人がが竹の杖を地に挿し、枝が逆に生えたと言う越後七不思議の竹、すなわち、サカサダケの話（同、51ページ、天然記念物調査報告、植物の部、第3輯）などは大凡の読者に重複することと思うから省略した。

藤田保之・藤本義昭共著　学校園の栽培管理全書

B6判、クロース装幀、6色刷りカバー付、300ページ、**定価290円、送料25円**、口絵、写真アート紙4ページ、挿入写真128図、発行所、タキイ種苗株式会社（京都市下京区梅小路通り猪熊東入る）

学校園と言えば神戸市妙法寺小学校と全国の学校の先生方の頭に浮ぶほどに全国的に徹底した学校園、子供の心理とあつた生きた学校園で会員諸氏には既に御知承の通りである。（同園については、会誌、第2巻1号参照）。

この度、同校藤田校長と同校の学園主任であった藤本先生が共同で徹底した栽培指導の書で128枚もの挿入写真で親切丁寧に手にとるように解説がしてある。本書1冊で学校園の総べてが用を充すように工夫編集してある。著者10数年の努力と経験から滲み出た我国稀有の指導参考書である。学校の先生方は勿論のこと一般家庭の人々にとつても、子供を持つ親に結び付いた書物である。

本書の内容　1.学校園の目的と意義　2.学校園に植える植物　3.学校花壇の計画　4.農機具　5.肥料　6.薬剤　7.種子のまき方　8.取木　9.接木　10.挿木　11.土の作り方　12.植え方　13.球根植物の栽培　14.水栽培　15.水生植物の栽培　16.多肉植物の栽培　17.食虫植物の栽培　18 高山植物の栽培　19.温室の管理　20.学級園の栽培植物　21.ラベル　22.学校園12カ月　23.学校園を新しく造る参考例　24.栽培植物の解説　25.索引。

なお、本書は室井の処でも取り継がせて戴きますからお申し込み下さいますようお願いします。御注文は絶対安全な振替貯金を御利用下さいますようお願いします。

申し込み所　神戸市長田区片山町1の176　室井 綽
振替番号**神戸8941番**

昭和三十三年一月三十日　印刷
昭和三十三年一月三十日　発行

【非売品】

神戸市長田区寺池町一丁目
県立兵庫高等学校
発編集兼行者　室井 綽

神戸市葺合区二宮町一丁目
神戸市立二宮小学校
同　古川博二

明石市大藏谷
県立明石高等学校
会計　渋谷久雄

（兵庫県生物学会）
（振替口座神戸一七五〇一番）

神戸市長田区西尻池町五丁目一三
印刷所　高田印刷紙器工廠
電話神戸（代表）二六二五番

発行所　兵庫県生物学会